寿安さん

【ナレーション】

今から四百年程前のお話です。

江戸時代の始めに、後藤寿安(ごとうじゅあん)さんという人がいました。

寿安さんは伊達政宗(だてまさむね)の家来で、キリシタンでした。

キリシタンとは、キリスト教を信仰する人のことです。

ヨーロッパの新しい知識を教えてくれるキリシタンを正宗公はとても大切にしていました。

寿安さん

【ナレーション】
正宗公が寿安さんを、城に呼びました。

【正宗】
「寿安よ、何事にも熱心なお前に領土をくれてやろう。」

【寿安】
「えっ、私が領主様ですか。」

【正宗】
「北にある福原(ふくわら)をまかせる。
大変な所だが、お前の持っている知識を生かして、良い所にしてくれ。」

【寿安】
「はい。私の出来る限り、素晴らしい所にしたいと思います。」

【ナレーション】
福原は、今の岩手県奥州市水沢区と胆沢区にまたがるところにあたります。
寿安さんは、福原がどんな所なのか楽しみでした。

寿安さん

【寿安】
「えー。私は、後藤寿安といいます。
今日からここ福原の領主になりました。
困ったことがあったら、何でも言ってください。
私と一緒にかんがえましょう。」

【農民Ａ】
「おもしぇ人が領主さまになったなあ。」

【農民Ｂ】
「あんまり偉(えれ)そに見えねども、大丈夫だべか。」

【ナレーション】
寿安さんは、領民に温かく迎えられ、領民のために尽くすことを誓いました。

寿安さん

【農民Ｂ】
「さっぱり雨が降らねなあ。まだ日照りかあ。」

【農民Ａ】
「今年(こどす)も米は駄目だな。」

【寿安】
「どうかしたのですか。
随分田んぼが荒れてるようですが。」

【農民Ｂ】
「あ、寿安さん。見でけらい。
この辺(あだり)の田んぼは、ちょこっと日照りが続いただけで、この有様なんですよ。」

【寿安】
「これはひどいなあ。
これでは作物は育たないだろう。」

【ナレーション】
この地域は、水の利が悪く、土地は荒れ放題でした。
一緒に福原を訪れた友人の宣教師(せんきょうし)も「まるでアラビアの砂漠のようだな。」と驚いていました。

寿安さん

【ナレーション】
寿安さんは、丸一日、見分森(みわけもり)の丘に立って、南に広がる荒れ地を見渡しました。

【寿安】
「ふーん。
水を引く事さえ出来れば、ここはきっと豊かな土地になるんだけどなあ。
そのためには、あの向こうに流れている胆沢川から水を引くしかないか。
・・・うーん。これは大変な仕事になりそうだぞ。
よーし。」

寿安さん

【ナレーション】
西洋の土木技術をよく知っている寿安さんは、胆沢川から田んぼへ水を引く為の堰を作ることを決め、建設に取りかかりました。

【寿安】
「よし。ここを水の取り入れ口にすれば、向こうの荒れ地までたくさんの水が引けそうだ。
だけどあっちの地面の方が高いところにあるから、設計が難しいなあ。
間違わないようにしっかり計算しないといけないな。」

【ナレーション】
寿安さんは、いったん仕事を始めると、脇目(わきめ)もふらず夢中になって働きました。

寿安さん

【ナレーション】

堰の建設工事には、たくさんの工夫がありました。

真っ暗な夜に、水をいっぱい貯めた桶(おけ)を地面に置き、遠くに立てたあんどんの光を、その水に映(うつ)して土地の高さを測(はか)ったり、また、運転機と呼ばれるクレーンの様な機械を使って、石を積み上げたりしました。

これらの技術は、江戸時代の日本では珍しいもので、世界でも最新の技術でした。

寿安さん

【ナレーション】
途中、洪水等で何度も何度も作りかけの堰が流されたりして、堰の建設はとても困難なものでした。

しかし、寿安さんと寿安さんを信じて頑張っている農民達のおかげで、少しづつ、少しづつ進みました。

【寿安】
「皆さん、いっぱい食べて、完成まで頑張りましょう。」

【農民Ａ】
「寿安さんこそ、ちゃんと休んで、しっかり食ってけろ。」

寿安さん

【ナレーション】

建設工事の費用は、莫大(ばくだい)なものになりました。

寿安さんは、自分の家のものを売り払い、借金をしてまで、みんなの為に道具や食べ物を揃えました。

こうして、建設が進むある日の事です。

寿安さん

【ナレーション】
伊達政宗公は、寿安さんを城に呼び寄せました。

【正宗】
「頑張っているようだな、寿安。
今日ここに呼んだのは他でもない、寿安よ、お前に厳しい事を言わなければならない。
・・・キリシタンをやめてくれぬか。」

【ナレーション】
寿安さんはとても驚き、そして悲しくなりました。
これまで寿安さんたちキリシタンを、大切にしてきた正宗公でしたが、江戸幕府からキリシタンを弾圧するように命令を受け、これ以上、寿安さん達をかばい続ける事ができなくなったのです。

寿安さん

【寿安】
「殿の気持ちは大変ありがたく思います。
しかし、私は人を大切に思う気持ちや、たくさんの技術を教えてくれた彼らを裏切る事はできません。
信仰をやめる訳にはいかないのです。」

【ナレーション】
寿安さんの信仰心はとても強く、正宗公の頼みでも変わりませんでした。

【正宗】
「そうか、ワシの頼みでも聞けないというのか。
・・・寿安よ、すぐにでもこの藩を出るのだ。
お前をこの伊達政宗の藩から追放する。」

【ナレーション】
寿安さんは何も言わずに、静かに頷(うなず)きました。
寿安さんを殺したくない正宗公は、追放する事によって、命を助けようとしたのです。

寿安さん

【ナレーション】
こうして寿安さんは、福原を去る事になりました。

豊かな土地になることを夢見た寿安さんは、みんなに別れを告げる間もなく、よその土地へと行かなければならなかったのです。

寿安さんがいなくなり、堰の工事を進める事が出来なくなった福原の農民達は、途方に暮れてしまいました。

【農民Ａ】
「途中まで作ったあの堰は、なじょすればいいんだ。」

【農民Ｂ】
「寿安さんがいねんだば、堰なんか作れねーべじゃ。
あーあ。」

【ナレーション】
そんな風に、村の人々が希望を失って、暗い気持ちになりかけていた時です。

【千田】
「みんな、聞いてくれ。」

寿安さん

【ナレーション】
立ち上がったのは、寿安さんの弟子の千田左馬(ちださま)と遠藤大学(えんどうだいがく)でした。

【千田】
「寿安さんはいない。
それはどうしようもない事なんだ。
寿安さんは、私たちの為にこんな大変な工事をしてくれたんだ。
ここから先は、私たちだけで、寿安さんの仕事をやり遂げようじゃないか。」

【農民Ａ】
「んだな、寿安さんが見たら、たまげるような立派な堰を作るぞ。」

【農民Ｂ】
「おお。今度は、寿安さんの為に頑張るべ。」

【ナレーション】
千田左馬と遠藤大学を中心に、農民達のやる気が戻りました。
建設工事は、これまで以上に大変なもので8年がかりの大工事となりました。
こうして、みんなの強い協力で堰は完成しました。

寿安さん

【ナレーション】

そして、ついに水が無い為に荒れていた土地が、豊かに生まれ変わったのです。

この出来上がった堰は、寿安さんにちなんで寿安堰(じゅあんぜき)と呼ばれました。

この仕事が四百年近く経った今でも、この地域に住む多くの人々の生活を支えているのです。

毎年、春と秋には寿安さんに感謝して、祭が開かれています。

ところで、寿安さんは福原を去った後、どうなったのでしょうか。

寿安さん

【ナレーション】

寿安さんは、キリシタンの弾圧からなんとか逃げ延びて、新しい土地で生活していました。

そして、その土地の人々に、技術や、人を慈(いつく)しむ心を教えたりしたそうです。

おしまい